



You will go most safely in the middle

B A L L H O L

谷崎潤一郎文庫

呪われた戯曲
病蓐の幻想 魔術師
恐怖時代 白日夢
他七篇

六興出版

LIBRA



Opal · Beauty · Harmony

Intellectual balance · Sept 24

Hydrangea · Green

Venus · Airy · Oct 23



谷崎潤一郎文庫

八八〇円

第二卷 恐怖時代・人魚の嘆き

昭和四十八年 九月十五日 発行

著者 谷崎潤一郎

発行者 吉川文子

印刷 大日本法令印刷

製本 手塚製本

発行所 六興出版

東京都文京区水道二一九―二

郵便番号 一一二

電話〇三(九四三)三四三一

振替 東京 九二四四八

© 1973 MATSUKO TANIZAKI, Printed in Japan.

落丁・乱丁の本はお取り替え致します

0393—02405—9216

目次

恐怖時代	三
病蓐の幻想	九
人魚の嘆き	二二
魔術師	三七
天鵝絨の夢	四七
鶴唳	五七
白日夢	六九

既婚者と離婚者

二二

呪われた戯曲

三三

ある少年の恐れ

二六

アヴェ・マリア

三〇

青塚氏の話

三七

注解

四〇

解説

四二

監修

谷崎松子

野村尚吾

恐怖時代

二幕

人物

春藤家の太守

年齢二十七八歳、残忍にして血を好む大名

春藤鞆負

太守の親族、春藤家の家老職、四十歳ぐらい、奸譎なる佞臣

磯貝伊織之介

十八九歳の伶俐にして武術に達し、眉目秀麗なる小姓、太守の寵臣

細井玄沢

春藤家の医者

珍斎

はなはだしく臆病で剽軽なる

氏家左衛門

近侍の武士、忠臣

菅沼八郎

同

お銀の方

太守の嬖妾、二十四五歳

梅野

お銀の方に仕うる女中、三十歳前後

お由良

珍斎の娘、十六七歳、女中梅野の腰元

その他侍、女中数人

時——何將軍の代の何年何月とも定かならず、ただ大体に旧幕時代の出来事と覚しき言語風俗を用うれば足る

所——江戸の深川辺りの、極めて宏大なる春藤家の下屋敷

第一幕

第一場

お銀の方の部屋、正面に床の間と違い棚、右側に書院の窓、それにつづいて荻戸が蔽まつて、戸の外は長廊下になっている。廊下の彼方には、宏荘な御殿の奥庭の、池だの築山だの燈籠だのが微かに見えて、西に傾いたまんまるな月が、丁度築山の松の梢の蔭に沈もうとしている。部屋の左側は遣り水に菊の花を描いた絢爛な金襴。勿論その金襴の向うにも、立派な座敷や畳廊下が数限りなく連なっているらしい。夏の夜の半分更け渡った刻限である。部屋の上手に七草の裾模様のある白綸子の蚊帳が釣つてある。蚊帳の中に、お

銀の方が蒲団の上にうずくまって、脇息に凭れたまま物思いに耽っているけれど、はつきりとは動作が分らない。左手の蔕戸をすっかり明け放って、女中の梅野が鴨居際に団扇をつかいながら庭を眺めて据わっている。その傍に蚊遣り火が焚かれている。広い座敷に燈はわずか一点、下手の金襴に近く燭台がぼんやり灯っているのみで、その外に光るものとしては、沈みかかった月の明りと、庭先の廊下に置かれた大きな螢籠ばかりである。涼しそうな夜風が折々室内へ吹き込んで、蚊やりの煙と白綸子の蚊帳をはたはたと揺めかせる。

幕があくと間もなく、次の間の時計がじい、じいと九つを打つ。

お銀の方 (蚊帳の中より) ……梅野、梅野、梅野は其処にお居やるか。

梅野 はい、最前からこの通り、蚊に喰われながらじっと控えております。何ぞ御用でござりまするか。

お銀の方 今の時計は、あれは何時じゃ。

梅野 多分九つでござりましょう。築山の彼方に見える月影が、もうじき西へ沈む刻限でござります。

お銀の方 夏の夜は短いものと極まっておるに、てもまあ今宵の待ち遠な。……どう遊ばしたことぞいのう。

梅野 ほんにお部屋様の気短かな、そのようにお急ぎなさらずと、やがてお越しになりましたしょうほどに、ちと縁先へお出遊ばして、涼みがてらに螢籠など御覧じませ。

お銀の方 いえいえ今宵はもうあきらめて、このまま休んでしまふのじゃ。どうせお越しがないものなら、螢籠も蚊やり火も皆片寄せてしまふたがよい。

梅野 この目印の蚊やり火と螢籠を片寄せてしまふたら、お可哀そうに折角忍んでおいでなさる朝負様が広いお庭の道に迷うて、御難波遊ばすでございましょう。それでのうても今宵のような蒸し暑い夏の夜に、まだ九つではなかなか局の人々も寝静まっておられません。かりにも男と名のつく者は、殿様の外に一人も這入れぬ奥御殿へ、掟を破ってお越しになるのは容易なことではござりませぬ。もしも誰ぞに見付かったら、たとえ御家老の御身分でも命はないに極まった訳、少しは時刻が遅れたとて、そのように仰っしゃるものではござりませぬぞえ。

お銀の方 命が惜しくば来ぬがよい。命を捨てての恋路とは、初めからよう知れておるはずじゃ。

梅野 あれ、あれ、御覧なさりませ。月がすっかり西へ沈んでしまいました。(庭の面も室内も更に一層薄暗くな

る）恋路の邪魔をする月影が、隠れてしまえばお庭は真っ暗。忍んでおいでなさるには、丁度これからが究竟の刻限でござります。

一陣の夜風がさつと吹き入って、一と入強く蚊帳に波を打たせる。燭台の火がしきりに明滅する。その時何処やらで、風の音とも人の言葉とも判らぬようなかな声か聞える。

声 ……梅野どの、……………梅野どの……………

梅野 はい、（庭の方を屹と見つめて、合図の螢籠を高く掲げながら上げ下げする）……………今のはたしかに、……………もしお部屋様、お越しなされたようでござります。早う此方へお出迎え遊ばしませ。

お銀の方 はてそのように騒ぐには及ばぬ。妾はお越しを待ちかねて、とうに寝入ってしまったと、そなたからきっぱりと断りを云うて賜。情ないお方に用はないぞえ。

梅野 もし鞆負様、……………此処でござります。此処でござります。……………

鞆負が廊下の隅からこっそりと、這い上がって身を縮めながら部屋の中に這入って来る。真っ黒な布で覆面をして、細かい紺緋の上布に紗の羽織を着て、袴の股立ちを取っている。

梅野 鞆負様、先程からお待ち兼ねでござんすわいな。

鞆負 し、しずかに、（覆面を脱いで袴の裾を下ろす。色白の、小太りに太った、見るから凜々しい水際立った男振り。にっこり笑いながら蚊帳の中を見入る。お銀の方は寝たふりをしている）……………お部屋様にはようお休み遊ばしてじゃな。……………

梅野 なんでお休みなさりましょう。あまりおいでが遅いゆえ、焦れて焦れて焦れ抜いて、空寝を使っておいでなさるのでござんする。早う御機嫌の直るように、これへお這入りなさりませいなあ。

梅野、鞆負の手を執って、蚊帳の方へ導こうとする。

鞆負（梅野の手を振り切る）いやいや、今宵はそれどころではござるまいに、かねて手筈を定めておいた大事を前に控えながら、お部屋様にも梅野どのにも、なぜそのような気楽を云うておいでなさるのじゃ。

梅野 その一大事があればこそ、お部屋様にはなお更越しを待ち懂れて、御案じなされてでござんする。……………

それ、あの約束の時刻には、まだ一時あまりの間がござんする。（再び手を執って、誘おうとする）

鞆負（梅野の手を払い除けて蚊帳の外に畏まり、お銀の

方の枕許へわざとらしく慇懃に両手をつく）お部屋様にはまだお眼覚めになりませぬかな。はしたない痴話喧嘩は下様の女子のすることでござります。昔の誰かならば知らぬこと、卑しい芸者娼妓のように不貞寝をなさるとは何事でござります。……そのようなお心がけて、殿のお家を傾ける、一大事は遂げられますまい。（お銀の方、この言葉にびっくりして、蓆の上に起き直る）さてさて、頼みがいのないお方じゃ。

お銀の方 靱負どの、またそのような趣味はっかり。……
…劍の刃を渡るような、危い恋路の楽しみがあればこそ、そなたの悪事に加担するのでござんしょうに、どうせ妾は素性の卑しい女ゆえ、芸者上がりが悪ければ、嫌おうと捨てようと殺そうと、そなたの自由になさりませ。お家乗っ取る謀が、そなた一人の力で成就するものなら、妾を殺して下さりませ。（蚊帳の外に出て、靱負の前に立て膝して据わりながら、銀の長煙管で煙草を吸う）もし靱負様、今更あまりな言葉でござんすぞえ。

靱負（ますます慇懃に頭を下げて、低い声で軽く笑う）
あはははは、今のはほんの戯れでござります。誰がお前

様の素性などを疑う者がござりましょう。昔のことは知らぬでもない拙者奴までが、そのお立派なお姿には、勿体なくて自と頭が下がります。

お銀の方 そのような媚び諂いは聞きとうもないわいの。いやならいやと仰っしゃって下さりませ。

靱負 ほんの一時の戯れを、そういつまでもお気に障えられては拙者が難儀いたします。これ梅野どの、どうぞ其方からよろしきように、お取りなし下されい。

梅野 妾風情の取りなしよりも、靱負様のお言葉一つで、じきにお部屋様の御機嫌が直ります。……したが、大事の前の小事とやら、もうお戯れはよいほどにして、お二人様ともお仲直りを遊ばした方がようござります。何ぞ密々の御談合でもござりまするなら、妾はひと先ずお次の間へ御遠慮いたしておりました。

靱負 これ梅野どの、今も拙者が申した通り、遠慮するとは意地の悪いお氣遣いじゃ。毎度ながら、其方の智慧を借用したい儀もござる。ぜひとも今宵の相談に与っていただくかねばなりません。……何はともあれ、廊下の雨戸が開いては無用心、憚りながら彼処を締めて下さらぬか。

梅野 畏まりました。

梅野 立ち上がって、左側の庭に臨んだ廊下の雨戸を静かに締めて、螢籠と蚊遣り火を奥へ運び去る。それから右側の金櫛をことごとく明け放ち次の間の様子を窺った後、燭台を室の中央に据えて蠟燭の心を剪る。室内が急に明るくなる。

梅野 さあ、こうしてしまえばもう大丈夫でござります。

お屋敷内でも殊更遠くかけ離れたこのお局のお庭先へ、こんな夜更けに誰も参りはいたしませぬ。どうぞ御安心遊ばして、何事なりと、つくり御相談なさりませ。

靱負（お銀の方の前へ両手をつく）お部屋様にはまだ御立腹でござるかな。あまりおむずかりなされては、また梅野どのに笑われることでござろう。よい加減にして拙者をお赦し下さらぬか。

お銀の方（笑いながら冗談のような調子で）赦し難き奴なれど、大事な話とあるからは、今宵はゆるして進ぜましょう。………そうして相談と仰っしゃるのは、どのようなことでござんすぞえ。

靱負 その相談は先ずゆっくりとくつろいでお話し申すでござろうが、今宵に限って酒のうてはあんまり淋し

い。のう梅野どの、とてものことにもう一つ心配しては下さらぬか。

梅野 ほんに忘れておりました。宵のうちから御酒の用意は整えておきましたほどに、ただ今これへ持って参ります。………（立ち上がる）そうしてせいせいするよう

に蚊帳を外してしましましょう。

梅野 蚊帳を外して次の間へ持ち去り、唐草の金時絵の膳に酒肴を載せて捧げて来る。お銀の方と靱負は坐を改めて席をひろげる。

梅野（両人の間へ膳部を置き、靱負に緞子の坐蒲団をすすめる）さあさあ、これへお直りなさりませ。お酒があれば御斟酌には及びませぬ。お仲直りのお印に、妾のお酌で、先ずお部屋様から一こんお乾しなさりませ。

兩人酒を飲み始める。お銀の方も男に負けず杯の数を重ねる。

靱負 してお部屋様には、今宵の手筈によもお手ぬかりはござりませぬな。………

お銀の方（不愉快らしい顔つきをする）靱負どの、話の腰を折ってはすまぬが、今宵に限ってそういつまでも改まって、「お部屋様」と仰っしゃるのはお止めなされて

下さりませ。ほんにほんに窮屈な。……

靱負 あはははは、そのお許しが出たからは、「お部屋様」は止めにいたそう。……そうして先夜の話のことは、うまく運んだでござらうの。

梅野 お気づかいには及びませぬ。お部屋様のお云い附け通り、妾がすっかりあの玄沢を云いくるめて、納得させておきました。……今宵丑の刻を合図に時を遅えずこの長廊下の東の隅の床下へ、そっと忍んで参るよう、申し付けてござります。

靱負 はてさてそれは御苦勞千万。……大丈夫とは存じおったが、てもあの玄沢め、よくも容易く承知いたしましたものでござるわい。

梅野 一大事を打ち明けたその後で、もしも納得しなければこうする（右の手で人を殺す意味を暗示する）つもりでござりましたが、つねづねから愈深で女好きの玄沢ゆえ、恐々ながら納得して、御註文の毒薬を、今宵手ずからお部屋様へ差し上げると申しましたわいな。

靱負 なるほどそれはそうでござらう。……のうお銀の方、味方が殖えて結構じゃが、この御家中でそなたの昔を存じておるのはあの藪医者と拙者ばかり、年は取って

も相手が色事師の玄沢では、どうやら拙者も気がかりじゃ。

お銀の方盾をひそめて黙って靱負を睨めつける。

梅野 おはははは、そのような御心配は御無用でござんすが、あの玄沢はかねがねから身の程も知らないで勿体なくもお部屋様へ横恋慕をしておる様子、それゆえにこそ今度のことも納得したのでござりました。薬の調合に事寄せて、せめてお側へ近づきたいのが、彼奴の腹でござんする。——後でどのような難題を云い出さぬとも限りませねば、お部屋様にも御用心遊ばした方がよろきります。

靱負 それでのもうても口説上手なああの玄沢、拙者も用心せねばならぬて。

お銀の方 ええまたしても愚かしい悪推量……かりにも大望をお抱きなざる靱負殿がそのような狭い御了見では覚束のうござんすぞえ。ちとおたしなみなさりませいなあ。

靱負 これは強いしつべい返し、そのお言葉には拙者一言もござらねど、さて色恋の道ばかりは男も女も愚かになるがあたりまえ、ましてそなたと玄沢では、つい悪推

量もしたくなるでござろうが。

お銀の方 ほんに憎らしい舌の根じゃ。よい程になさらぬと、もうもう今度は許しませぬぞえ。(火のついた煙管の雁首で、男の太股をぐいと突く)

靱負 はてまあお許し召されい。今のはあれは冗談でござる。あはははは。

お銀の方 つまらぬ邪推をなさらずと、もし玄沢が無体なことを云いかけたら、後とも云わず斬り捨てておしまいなさるがようござります。

靱負 仕儀によったらそう致すより外はない。しかしこの先どのような役に立とうも知れぬ男、なるべくならば慾と色とを餌にして、当分釣り寄せておきとうござる。

お銀の方 それを妾も知らぬではござんせぬ。慾に眼のないばかりか、身の程知らずの横恋慕が此方の附け目、今宵この場へ参ったら、手管一つで操なして、裏の裏を搦いてやる妾の腕前を、まあ物蔭で御見物なさりませ。靱負 そなたの凄腕前なら、拙者の胸にも覚えがござる。見物せずとも大丈夫じゃ。

梅野 それはそうと、その毒薬が手に入ってからからの大事な仕事は、誰の役目でございましょう。

靱負 さあそれじゃ。今宵の相談と申すのは、そのことでござるわい。……誰ぞ奥方のお側に侍る衆のうちに、頼める人はござるまいか。梅野どのにはよいお考えもござらぬかな。

梅野 妾もそれには苦勞いたしております。お側の衆は多勢いても、迂闊に頼めはいたしませぬ。……はて、何ぞよい思案はござりませぬかのう。

お銀の方、そなたは妾の智慧袋じゃ。何ぞよい工夫をして賜らぬか。

梅野 おお、よいことがござります。(ふと想い付いたように膝頭を打つ) 妾が長年召し使っております、腰元のお由良の父親——あのお茶坊主の珍齋をお頼みなさります。あの親父めを威嚇したら、必ずいやとは申しますまい。

靱負 いかさまお茶坊主の珍齋なら、勝手気ままに誰の傍へも馴れ近づいて、可愛がられる馴軽者、仕事をするに便利はござれど、てもあのような臆病者では……

梅野 たよりにならぬと仰っしゃるのでござりまするか。

お銀の方 梅野としたことが、不思議なことを云うではないか。臆病で馴軽で軽口ばかりたたいておる、珍齋のよ

うな男の数にも這入らぬ者に、めったなことは明かされまいぞえ。

靱負 女子供の相手をさせて、座輿を添える道具には、至極重宝な人間なれど、云わば下様で幫間などと申す輩に同じこと、大事を頼むはいかがでござろう。……それとも梅野どのには、何かあの男に見どころがござるかな。

梅野 さあ、取り柄と申すではござりませぬど、人に知られた臆病が此方の見つけものでござります。たとえどのような悪事でも、刃物を見せて威嚇かしたら、命惜しさに必ず承知いたします。

靱負 承知はするにいたしても、軽口ばかりたたくのが商売の珍斎、その上あれほど臆病では、また外の者に威嚇かされて、我等の大事を口外せぬとは限りませぬわい。

梅野 此方の頼みを引き受けて、一旦悪事を犯した上は、それも罪に堕ちる訳、うっかり喋舌りはいたしますまい。

靱負 そこが珍斎ではそう参らぬ。ただ目前の命惜しさに、何処へ行っても威嚇かされれば、すぐべらべらと白状するのが必定じゃ。

梅野 どうせ道具に使うだけの人間でござんする。長い間

にはそのような心配もござんすほどに、一度お役に立てた後、こっそり片附けてしまったなら、別段面倒はござりませぬ。その後始末は妾がきつと引き受けますれば、どうぞお任せなさりませ。それとも靱負様には珍斎の外に、お心当りがござりまするか。

靱負 さて格別に、心当りはござらぬが、……

梅野 そんならなお更妾にお任せなさりませ。——珍斎を除いては、お側の衆は皆奥方に忠義な者ども、それでのうてもわれわれを鵜の鷹の眼で睨んでおる、油断のならぬ人たちはばかりでござんすぞえ。

お銀の方 なるほど梅野の云う通り、あの珍斎を威嚇かすより外に工夫は見あたらぬ。ここは一番梅野に任せて、仕終おせてもらおうではござりませぬか。

靱負 いかさまのう、外に思案のない場合、それもあながち悪うはござるまい。随分危い計略ながら、上手に行けばこれほど都合のよいことはござらぬて。……悪事にかけては一枚上の梅野どの、そなたの御意見に従うことといったそうかの。

梅野 憚りながらきつと手落ちのないように、仕遂げて御覧に入れましょう。殊に妾は娘のお由良を、幼い折から

召し使うておりますれば、旁、珍齋とは主従の間柄、決していやとは云わせませぬ。

お銀の方 したが梅野、そなたのような折を窺って、珍齋に話をしやる。なんぼ相手が臆病でも、ただ威嚇かしや義理攻めでは、やすやす承知しまいがの。

靱負 迂濶な時には話せぬが、さればというてう、かう、かしてはおられまい。もう奥方のお産の日も、大分迫って参った様子、時機がおくれては一大事じゃ。

梅野 手筈の定まる上からは、早いに越したことはござりませぬ。明日ともいわずただ今お由良に云いつけて、ひそかに連れて参るように致させましよう。今宵この場でお部屋様の前へ呼びつけ、靱負様を始めとして妾も玄沢もともどもに、口を揃えて威嚇かして、さんさん胆を冷やさせたら、必ず利き目がござんする。

時計がハツを打つ。

梅野 おお、今のは八つ時、……もう玄沢が参る時分、

……

靱負 はて、拙者はここにこうしてはおられぬが、………
梅野 きつと約束の場所へ来て、待つておるでござんしょう。
う。妾はこれから玄沢を迎えに行つて参ります。靱負

様にはお次の間へお隠れなされて、様子をお聞きなされませ。

靱負 (何事が腹に一物あるような句調で) いやいやここらにうろついて、もしも彼奴に見咎められては却つて事の破れる基、玄沢も珍齋もそなたたちにお任せ申して、拙者は今宵は帰るといたそう。(立ち上がる)

お銀の方 (男の袂を捕えながら) もし、お待ちなされませ。急にそのようなことを云い出して、どうした訳でござんする。まだ其方には話もある。どうぞ物蔭に隠れていて、様子を聞いて賜いのう。

靱負 あまり其方の傍らにへたばり着いて、狭い見と笑われるのも心苦しい。話があらば明日の夜のこと、とにかくお暇申すでござろう。

お銀の方 さっきの話を根に持つて、またそのようにお拗ねなさるのでござんしょう。どうでも妾は帰しませぬぞえ。

梅野 お部屋様があの様に仰っしゃるものを、このままお帰りなさるとはあんまりでござんする。もし靱負様、われわれ二人であの玄沢をあやすところを、まあお慰みに見届けておいでなさりませいなあ。

靱負 見届けずとも拙者充分に安心いたしました。——断つ

て帰りとうはござらぬが、今日この頃の短夜に、ぐずぐずして空が白んで参ったらひと難儀……願望成就するまでは、大事な上にも大事を取って、用心せねばなりませんまいに、悪くお取りなされては、拙者はなだ迷惑いたします。何卒おゆるし下されい。(軽くお銀の方の手を払い除けようとする)

お銀の方 そんなら今宵はどうあっても、……

靱負 はてまあ、お放しなされませい。(手を振り切つて廊下に出で、前の如く覆面をして改まって囃居際に両手をつく) さようならばお部屋様、梅野どの、明日の夜更けにまた重ねて、……

お銀の方 きつとお越しを。待ちますぞえ。

靱負 廊下の左方に立ち去る。

お銀の方 些細なことを胸に含んで、何ぞという意地の悪い靱負どの、どうやら機嫌を損じたそうな。

梅野 大事な用事を捨ておいて、にわかにお帰りなされたには、仔細がありそうでござんする。

お銀の方 いずれにしても其方は此処を片附けて、早う珍斎を呼んで来たがよいではないか。

梅野 ほんにさようでござります。それに大方玄沢も妾の迎えを待つておるはず、お由良を使いに出した上で、ただ今じきにこれへ連れて参ります。

お銀の方 (梅野が立つて行こうとするのを呼び止める)

あ、これ梅野、待ちや。

梅野 何御用でござりまする。

お銀の方 ちよいと妾に耳を借しや。……

梅野 (傍へ寄つて耳をつけたが、聞いていたが、そのうちに少し顔色を変えて心配そうに四辺をじろ見廻し始める) なるほど、なるほど、それも御もつともではござりますが、しかし先の御相談では、……

お銀の方 ええまあそのような理窟を云わずと、妾の云う通りにしやいのう。

梅野 (何か非常なことを覚悟したらしく) そう仰しやれば詮ないこと、ええようござります。

お銀の方 そんなら早う。……必ずぬかつて賜るなや。

梅野 心得ましてござりまする。

梅野は座敷の内を片附けてから膳部を持って次の間へ退る。お銀の方は鏡台に据わりやや暫らく化粧に念を入れてから、一と入輝くばかりに美しくなつて、再び元の席へ